



底廊「牡丹の間」



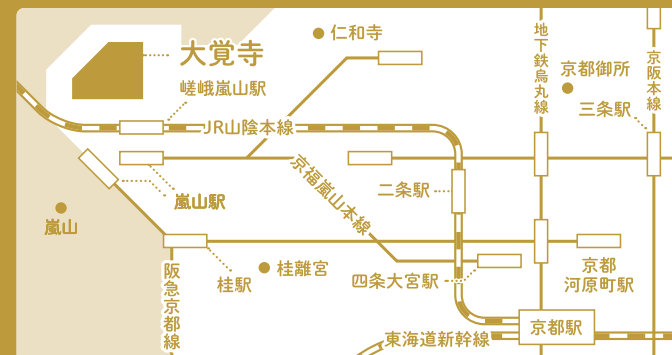
四季折々の大覚寺の景色(左から)春の勸修門、夏の大沢池、秋の「観月の夕べ」、冬の大沢池と心経宝塔

「嵯峨」という地

京都駅からJR山陰本線(嵯峨野線)に乗り約20分。現在の京都市右京区嵯峨にあたる地域のごとで、大堰川(桂川)にかかる渡月橋で有名な嵐山や、小倉山、北は上嵯峨の山麓を含むエリアです。古くから景勝地として知られ、平安時代には禁野(皇族専用の狩猟場)として、天皇や貴族の別荘が立ち並ぶ遊樂の地となりました。

門跡寺院とは

皇族や貴族が任職を務めた特定の寺院のことを指します。もともと「門跡」とは、仏教における祖師の正式な後継者という意味でしたが、鎌倉時代以降は格式の高い寺院そのものを表すこととなりました。大覚寺では現在も皇室とのゆかりの深さを示す証を境内の至るところで見つけることができます。



PR大使・音声ガイドナビゲーター



吉岡里帆 さん

京都府出身の俳優・吉岡里帆さんが本展のPR大使に決まりました。音声ガイドのナビゲーターも務めます。

開催概要

〔展覧会名〕 開創1150年記念 特別展

「旧嵯峨御所 大覚寺

～百花繚乱 御所ゆかりの絵画～」

〔英語展覧会名〕 Special Exhibition

Commemorating the 1150th

Founding Anniversary of Daikokuji

Treasures of Daikokuji: From

Imperial Villa to Buddhist Temple

〔会 期 〕 2025年1月21日(火)～3月16日(日)

〔休 館 日 〕 月曜日(ただし2月10日、24日は開

館)、2月25日(火)

〔開館時間〕 午前9時30分～午後5時

※入館は開館の30分前まで

〔会 場 〕 東京国立博物館 平成館

〔主 催 〕 東京国立博物館、大本山大覚寺、

読売新聞社

〔特別協賛〕 キャノン、大和証券グループ、

T&D保険グループ、

明治ホールディングス

〔協 賛 〕 JR東日本、清水建設、竹中工務店、

三井住友銀行、三井不動産、

三菱ガス化学、三菱地所、三菱商事

〔特別協力〕 文化庁

〔協 力 〕 光村印刷

〔お問い合わせ〕 050-5541-8600(ハローダイヤル)

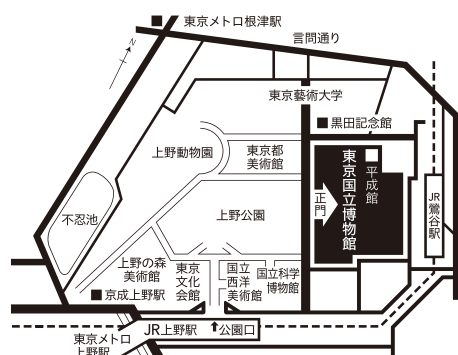
報道関係お問い合わせ

開創1150年記念 特別展「旧嵯峨御所 大覚寺 ～百花繚乱 御所ゆかりの絵画～」

広報事務局(ユース・プランニング センター内)担当 鈴木 片山、池袋

○〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8KN渋谷3ビル4F

○TEL:03-6821-9100 FAX:03-6821-8869 E-mail:daikakuji2025@ypcpr.com



東京国立博物館 平成館
TOKYO NATIONAL MUSEUM (UENO PARK)

〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
東京国立博物館ウェブサイト <https://www.tnm.jp/>
○JR上野駅公園口・鶯谷駅南口より 徒歩10分
○東京メトロ銀座線・日比谷線 上野駅、東京メトロ千代田線 根津駅、京成電鉄京成上野駅より徒歩15分

▶展覧会公式 Instagram
@daikakuji2025

▶展覧会公式 サイト
<https://tsumugu-yomiuri.co.jp/daikakuji2025/>



TNM
TOKYO
NATIONAL
MUSEUM

150th
読売新聞

8th
読売新聞

本展の収益の一部は、「熱くプロジェクト」における文化財・美術品の修理事業等に充てられます。

上: 重要文化財 牡丹図 下: 重要文化財 紅白梅図 (いずれも部分) 狩野山楽筆 江戸時代・17世紀 京都・大覚寺蔵

東京国立博物館
2025
1/21
3/16
平成館
上野公園

開創
1150年
記念

特別展

旧嵯峨御所

大覚寺

障壁画一〇〇面、
一挙公開。

PRESS
RELEASE

開催趣旨

京都西北に位置する嵯峨は、古くより風光明媚な王朝貴族遊覧の地として愛されてきました。平安時代初期、嵯峨天皇(786-842)はこの地に離宮・嵯峨院を造営し、空海(774-835)の勧めで持仏堂に五大明王像(現存せず)を安置します。その後、貞観18年(876)に皇女・正子内親王の願により寺に改められ、大覚寺が開創されました。来たる令和8年(2026)、開創1150年を迎えるのに先立ち、優れた寺宝の数々を東京国立博物館で一挙にご紹介します。なかでも、寺内の中央

みどころ

華やかな障壁画100面を
一挙公開



大覚寺には安土桃山～江戸時代に制作された約240面におよぶ襖絵や障子絵などの障壁画が伝来しており、これらは一括して重要文化財に指定されています(重文指定116面、附124面)。現在14か年にわたる大修理の途中ですが、本展では修理を終えたものを中心に、前後期併せて123面(前期100面、後期102面)を展示します。

歴代天皇による優美な書の数々

鎌倉時代後期、天皇家が2つに分かれた際の大覚寺統(後の南朝)の本拠となった大覚寺。その中興の祖である後宇多法皇をはじめ、ゆかりの深い歴代天皇の書(宸翰)をご紹介します。

に位置する宸殿は、元和6年(1620)に後水尾天皇に入内した和子(東福門院)の女御御所に後に移築したものと伝えられ、内部を飾る襖絵・障子絵などの障壁画は、安土桃山～江戸時代を代表する画家・狩野山楽(1559-1635)の代表作として重要文化財に指定されています。本展ではこれらのうち120面を超える障壁画のほか、信仰の歴史を物語る歴代天皇の書や、平安時代後期の仏像を代表する明円作「五大明王像」など、密教美術の名品も公開します。

天皇家ゆかりの「五大明王像」
初めて5体そろって東京に登場

平安時代後期の仏像の最高傑作のひとつである、明円作「五大明王像」(本尊)を、初めて5体そろって東京で公開します。

非公開「正寝殿 御冠の間」を
会場内に再現



通常非公開の重要文化財「正寝殿(客殿)」のうち、歴代門跡の執務室であった「御冠の間」を展示室内に再現します。ここは後宇多法皇(1267-1324)が院政を敷き、元中9年(明徳3年、1392)には南北朝講和の舞台になったとも伝えられています。



障壁画の展示空間(イメージ)





重要文化財
牡丹図 狩野山楽筆
江戸時代・17世紀
通期展示
宸殿「牡丹の間」の東・北・西面を飾る横絵。大ぶりの牡丹を、連続する横長の画面に配置するという独特の構図であるが、花枝の位置を細かく計算して配置することで、リズムカナル展開と画面の奥行きを見事に表現している。安土桃山時代から江戸時代にかけて活躍した画家・狩野山楽(1559-1635)の代表作。

第1章

嵯峨天皇と空海 一離宮嵯峨院から大覚寺へ

嵯峨の地を愛した嵯峨天皇(786-842)は、平安京への遷都後まもなく、離宮・嵯峨院を造営します。空海の勧めで持仏堂に五大明王像(現存せず)を安置し、承和元年(834)には新御所を造営してここに隠棲しました。貞観18年(876)には皇女の正子内親王が、その子である恒寂入道親王(恒貞親王)を開山として大覚寺を開創します。第1章では、嵯峨院や初期の大覚寺の様子を示す寺宝をご紹介します。



大威徳明王

軍荼利明王

不動明王

降三世明王

金剛夜叉明王

重要文化財

五大明王像 明円作
平安時代・安元3年(1177)
通期展示

不動明王を中心に5体の明王から成る五大明王。平安時代後期に京都の上級貴族の仏像制作を担った仏師・明円が制作した。天皇家ゆかりの仏像で、力強い姿の中にも整った顔立ちや柔らかな体つきには気品があふれ、洗練された美しさを示している。

第3章

歴代天皇と 宮廷文化

重要文化財

源氏物語 室町時代・16世紀 通期展示

源氏物語全54帖のうち46帖を伝える。伏見宮貞敦親王(1488-1572)を中心に伏見宮家とゆかりの深い貴族らによって永正14年(1517)から天文8年(1539)ごろにかけて書写されたもので、各帖の外題(表紙に付された短冊形の表題)は後柏原天皇による。当時一流の文化人であった三条西実隆・公家ら親子も書写に携わっており、第54帖「夢浮橋」の末尾には公家の跋文が残されている。



重要文化財

太刀 銘「忠(名物 薄緑(膝丸))」
鎌倉時代・13世紀 通期展示

源満仲、頼光、義経など、清和源氏に代々継承された、「薄緑」および「膝丸」の伝承をもつ太刀。源満仲は平安時代中期の武士で、藤原摂関家と強く結び付いて清和源氏発展の基礎を固めた。長大で力強い刀身に細やかに乱れた刃文を焼入れており、鎌倉時代初期の備前刀の作風が認められる。



第4章

女御御所の襖絵 ―正寝殿と宸殿―

重要文化財

松鷹図 狩野山楽筆
安土桃山〜
江戸時代・16〜17世紀
前期展示

正寝殿「鷹の間」を飾るもので、12面の横絵と1面の壁貼付絵からなる。力強くダイナミックにうねる巨大な松の描き方は、山楽の師・狩野永徳の影響を強く受けたものと考えられている。安土桃山時代の香りを残す山楽の代表作のひとつ。

大覚寺伽藍の中心となる宸殿(重要文化財)は、元和6年(1620)に後水尾天皇に内した和子(東福門院)の女御御所がのちに移築されたものと伝えられています。また、宸殿北西側に位置する正寝殿(重要文化財)はさらにさかのぼった安土桃山時代の遺構と考えられており、これらを飾る横絵や障子絵240面は一括して重要文化財に指定されています。これらの多くを手掛けたのが、安土桃山〜江戸時代の代表的な画家である狩野山楽(1559-1635)と、江戸時代中期に京都で活躍した渡辺始興(1683-1755)です。本章では、壮大で華麗な空間を体感いただくべく、このうち123面の障壁画群をご紹介します。

重要文化財

紅白梅図 狩野山楽筆
江戸時代・17世紀
通期展示

宸殿「紅梅の間」の南面を飾る横絵で、満開に咲き誇る紅白梅の太木と、水辺に佇む鶯などの鳥たちを描く。現在8面が残るが、もとは左右にさらに連続する画面があったと考えられる。太木を画面全体に展開する表現を師・狩野永徳から引き継ぎつつ、さらにそれを洗練させた、山楽の最高傑作のひとつ。



(部分)

重要文化財

野兔図 渡辺始興筆
江戸時代・18世紀
通期展示

正寝殿「狹屋」の腰障子12面に描かれた板絵。作者の渡辺始興(1683-1755)は近衛家に仕えた画家で、京都で活躍した。多様なポーズの兔たちを、変化を持たせながら描いている。寺伝によると、幼くして近衛家から大覚寺に入った第41代門跡寛深(1723-1787)を慰めるために描かれたという。



正寝殿襖引手金具
江戸時代・17世紀
通期展示



重要文化財

野兔図 渡辺始興筆
江戸時代・18世紀
通期展示

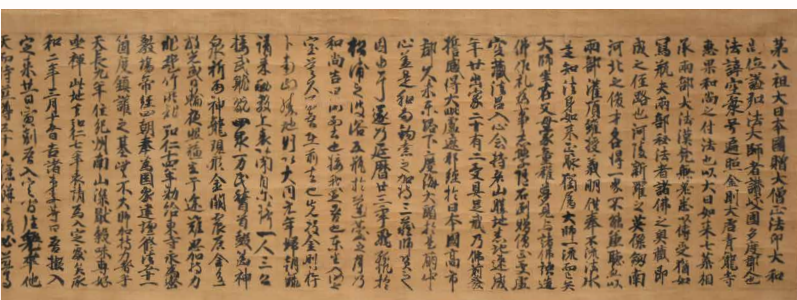
正寝殿「狹屋」の腰障子12面に描かれた板絵。作者の渡辺始興(1683-1755)は近衛家に仕えた画家で、京都で活躍した。多様なポーズの兔たちを、変化を持たせながら描いている。寺伝によると、幼くして近衛家から大覚寺に入った第41代門跡寛深(1723-1787)を慰めるために描かれたという。

正寝殿と宸殿の襖に取り付けられている引手金具。周囲に天皇家を象徴する菊、中央に徳川将軍家の家紋である三葉葵を施した特別なデザインで、徳川秀忠の娘・和子が後水尾天皇に入内する際に制作されたものと考えられている。

第2章

大覚寺中興の祖・後宇多法皇 一「嵯峨御所」のはじまり

文永5年(1268)、後嵯峨上皇が出家して第21代門跡と数えられて以降、子の龜山、孫の後宇多の各上皇も出家して大覚寺に入ります。なかでも後宇多法皇(1267-1324)は真言密教に帰依して伽藍整備を進め、ここに仙洞御所を新造したため、大覚寺は嵯峨御所とも称されるようになりました。第2章では、大覚寺中興の祖と称される後宇多法皇の事績をご紹介します。



(部分)

国宝

後宇多天皇宸翰 弘法大師伝
後宇多天皇筆
鎌倉時代・正和4年(1315) 前期展示

残された史料をもとに後宇多法皇自らが記した空海(774-835)の伝記。空海への尊崇の深さがしのばれる。謹厳な楷書から力強い草書と変化する書体が見どころ。



(部分)

国宝

後宇多天皇宸翰 御手印遺告
後宇多天皇筆
鎌倉時代・14世紀 後期展示

後宇多法皇が大覚寺の興隆を願って前御前に記した21か条の定め。冒頭と各条のはじめに、朱で手形(御手印)を押している。本来は25か条を目指したものとされ、各所に推敲の跡がみられる。



(部分)

重要文化財

後宇多天皇像
鎌倉時代・14世紀 前期展示

後宇多法皇(1267-1324、在位1274-87)は龜山天皇の第二皇子で、大覚寺中興の祖。真言宗を篤く信仰し、大覚寺で院政を敷いたため「大覚寺殿」と称された。この肖像は出家前の姿を描いたもので、非常に細い線を何度も引き重ねて目鼻や顔の輪郭を描き、気品のある容貌を的確に表現している。



(部分)